

2008年11月12日

大学院学生の海外インターンシップ

小林春夫

2008年10月6日—10月31日の約4週間、研究室の修士1年の八木拓也と三田大介の2名が米国ユタ州ソルトレーク市のCirque社にてインターンシップを行った。Cirque社は容量式タッチパネルセンサで高い技術をもち、この分野で大きなシェアをもっている。(ハイテクベンチャーとして設立され、現在はアルプス電気の子会社になっている。) Cirque社の大嶋洋一社長が、タッチパネルセンサのインターフェースのアナログ回路技術が重要と判断し、日本の大学のアナログ回路系の研究室から学生を受け入れてインターンシップを行いたいというご英断によってこのインターンシップが実現した。

大学院生が米国において4週間程度インターンシップを経験するというのは、一昔前の感覚では夢のような話である。

2008年4月にアルプス電気の顧問 池田弘之様からそのお話をいただきご説明を受けた。非常に良いお話なので各大学から応募があろうから正直私の研究室では力不足と思っていたが、アルプス電気およびCirque社のご厚意により2名を受け入れてもらった。ビザ取得等の手続きおよび渡航・滞在費の経済面でも全面支援を受けている。学生2名はCirque社にてアナログ回路分野で最も重要な技術であるオペアンプ設計の開発に加わり、一通りの回路設計を経験した。当地では米国の会社の自由な雰囲気、原理原則に基づく仕事の仕方、また米国の生活、大自然を経験でき、非常に有益であったと語っている。もちろん、当地でのCirque社の方々の仕事、生活面での親切なご支援があったことはいうまでもない。

現在、少子化現象が進み、また若者の理工系離れの傾向がある。一方で産業界では電気電子系技術者はますます需要が多く、大学への求人が非常に多い。また、電気電子分野では国際競争も熾烈である。そのこともあってか、大学の電気電子分野の研究室は産業界から様々な形でのご支援を受けており、「世間は大学に対して暖かい」と実感することが多い。今回のアルプス電気、Cirque社の全面支援による海外インターンシップが地方大学である群馬大学に対して行われたということは、日本での大学と産業界のよりよい関係・連携を加速する大きな意義のあることだと思う。